

E・マルリットの「後継者」としてのヴィルヘルミーネ・ハイムブルク

竹田和子

はじめに

E・マルリット E. Marlitt (1824-1887) がドイツ語圏初の大衆女性作家として活躍を始めたのは1860年代後半である。この時代には識字率が向上し、読書人口が大幅に増大した。さらに印刷技術や輸送手段の発展により大量の印刷物が速く広範囲に運ばれるようになり、価格の安い雑誌、貸し出し図書館、行商人が運ぶ冊子など様々な方法で提供される読み物を幅広い層の人々が手に取れるようになった。そのような状況下でマルリットをロールモデルとして自分も小説を書きたいと思う女性が続々と登場することになった。その中でよく名前が挙げられるのが、E・ヴェルナー (E. Werner 本名 Elisabeth Bürstenbinder, 1838-1918) や今回取り上げるヴィルヘルミーネ・ハイムブルク (Wilhelmine Heimbürg, 1848-1912) である。しかしマルリットも含めて、彼女たちの作品はその人気の一方で、生前から低俗と批判されることも多く、死後は全く忘れられてしまう。それは例えば彼らが時代精神と深く結びついていたため時代の変化に置いて行かれた、あるいは類型的な作品が多数乱立し、次第に埋もれていったというような理由が考えられるだろう。しかしただ通俗文学という理由だけで、作品の内容に踏み込むことなく、低俗なものとして無視されてきた側面も否定できない。明らかに作品を読んでいない的外れな批判が綿々と受け継がれていることも多い。¹

しかしアメリカやイギリスで通俗文学研究が広がり、積極的な評価が行われるようになると、1990年代頃からは、ドイツでもこの分野を再考する流れが広がり、マルリットの再評価が試みられている。ただし、この流れはなかなか他の作家には広がらず、今回取り上げるヴィルヘルミーネ・ハイムブルクも、マルリットのエピゴーネンの一人として名前が挙げられるに留まっている。

生前多くの読者を惹きつけ 1930年代になっても20版近くまで版を重ねて読み続けられたハイムブルクや他の消えてしまった作家たちは、本当に従来の評価通り価値のないものだったのだろうか。多くの読者がいたということは、その作家や作品には人を惹きつける何かがあったということである。折しもマルリットやハイムブルクが作品を書いた19世紀後半から20世紀初頭は、政治的にはドイツが統一され、経済的には工業化が進み、大企業を経営する裕福な市民が登場する一方で職人、商店主などは工場労働者に飲み込まれつつあるなど社会が流動化した時代である。当時の読者が実際に彼らの小説の何に惹かれたのか、その時代は作品の中でどのように描かれているのか、そしてこれらの作家に対する評価には当時の社会の一端が表われている。これまで注目されてこなかった作家たちを掘り起こし、具体的に検討することで、今まで見過ごされてきたその時代の側面、特に市民社会が変質し内部から崩壊していく様子がよりはっきりと見えてくるかもしれない。この論文ではハイムブルクがマルリットの「後継者」とされるに到った経緯を辿り、その評価が本当に妥当なものだったのかを検討してみたい。

1 ハイムブルクの経歴

ハイムブルクは本名をベルタ・ベーレンス (Bertha Behrens) といい、ハルツ地方のターレで開業医の娘として生まれた。² 1852年に父親は軍医となり、一家はクヴェドリンプルクに移った。以後父親の配属先変更に伴いシュレーゲンやアルトマルクの小都市で成長する。当時の市民女性では普通のことだったが、学校で初等教育を受けた後は家庭で教育された。彼女はマルリットの大ファンとなり、マルリットの住んでいたアルンシュタットにいる親戚を訪ねたときには何時間もその家の前をうろうろしたが、会うことはできなかった。

たというエピソードが残っている。(G 1884 H.39 S.648) 25 歳ごろから文学への挑戦を始め、1875 年のクリスマスに短編小説『メラニー』*Melanie* を父親に贈った。これを父は娘に黙って女性雑誌『ヴィクトリア』*Victoria*³ に送り、同誌に掲載されることになった。このときの原稿料 75 マルクで、彼女は書き物機を買った。さらに執筆を続けようと意図したものと思われる。翌年 1876 年に『私の年老いた友人の人生より』*Aus dem Leben meiner alten Freundin* を完成させると、やはり父親によって今度は『ガルテンラウベ』*Die Gartenlaube* に送られたが、掲載には到らなかった。しかしこの作品は『マグデブルク新聞』*Magdeburgische Zeitung*⁴ に掲載され、単行本化されてヒットした。『ガルテンラウベ』編集長エルンスト・カイル (Ernst Keil, 1816-1878) はすぐに彼女に連絡を取り、原稿を採用しなかったことについて、自分が「休暇でカールスパートに滞在していたため、残念ながらこの魅力的な物語を直接読むことができなかったのです。さもなければそれを決して手放さなかったのに」(G 1884 H.39 S.650) と言って、自分の雑誌の「協力者」(G 1884 H.39 S.650) になるように申し入れた。ハイムブルクは 1878 年に『ぼろ切れ水車のリースヒェン』*Lumpenmüllers Lieschen* (以下『リースヒェン』) を『ガルテンラウベ』に渡すと、以後ほぼ毎年のように同誌で長編小説を発表するようになった。こうして彼女は憧れの E・マルリットの「同僚」になったのである。1881 年に父が退役すると、彼女はドレスデン近郊に果樹園に囲まれた家を買ひ、両親に何不自由ない暮らしを与えた。

1887 年にマルリットが最後の作品を完成させることなく死ぬと、編集部はハイムブルクにその完成を依頼した。彼女はそれを引き受け、『梟の家』*Das Eulenhäus* は翌 88 年『ガルテンラウベ』第 1 号から 25 号まで、「E・マルリット遺作、W・ハイムブルクにより完成」(Hinterlassener Roman von E. Marlitt. Vollendet von W. Heimbürg) として掲載されることになった。この作品については後で詳しく述べるが、これによりハイムブルクは『ガルテンラウベ』から看板作家マルリットの「後継者」と認定されたことになり、作品冒頭に明

示されたので、読者もそのように認識したはずである。さらに 90 年代には同誌を発行する出版社 Verlag Ernst Keils Nachfolger (後に Union Deutsche Verlagsgesellschaft) から 10 巻の全集、90 年代半ばにさらに 5 巻と 1904 年から 06 年にもう 5 巻の作品集が出版され、小説家として成功を収めた。

『梟の家』が掲載された 1888 年、彼女は精神を病み、医師のすすめにより両親と離れ、独立してドレスデンに住むようになった。原因が何かは記録がないので分からない。両親との間に問題があったのかもしれないが、独立してからも行き来はあった。ただし、結婚に関して経済的問題はなかったはずなのに理由は分からないが彼女は生涯独身だった。彼女の死に際して『ガルテンラウベ』に掲載された追悼文で、彼女が傷つきやすい性格で、友人たちが「それは神経質な内気さだけではなくほとんど病的な、自己肯定感の低さといってもよいほどの謙虚さに起因すると考えていた」(G 1912 H.39 S.839)、「彼女の苦しみは常に他の人への同情から起きていた」(G 1912 H.39 S.838) などと記述されているのを読むと、精神的に何らかの問題を抱えていたことが感じられる。晩年はほぼ引きこもった生活を送り、1912 年に 64 歳で生涯を閉じた。多くの読者を惹きつける作家として自活するだけでなく、家族にも豊かな生活をもたらした輝かしい成功の一方で、人前に出ることを恐れ、ひっそりと執筆活動を行った彼女の人生にはどこか暗い陰を感じてしまう。その陰は「明るい幸福な世界 (die heile Welt)」を描いているとされる作品にも表われている。それでは彼女の描く世界がどのようなものだったのか、「マルリットの後継者」が正しい評価なのかを検討するために、彼女が完成したマルリット最後の作品『梟の家』について見ていきたい。

2 「マルリットの後継者」へ

『ガルテンラウベ』の看板作家だったマルリットが最初の作品を発表したのは遅く、1865 年 40 歳の時で、完成した短編小説を読んだ弟が密かに原稿をカイルに送ったのがきっかけだった。これ

はハイムブルクのデビューの経緯と酷似しているが、これは女性作家の登場に際してのマーケティング戦略だったかもしれない。つまりきちんとした市民階級の娘が自分から作品を売り込むのははしたないという批判を避けるための類型的なエピソードとも考えられるからである。マルリットに刺激され、自分も作家になりたいと思う女性が続々と現れたが、1884年に『ガルテンラウベ』がアドルフ・クレーナーに売却されると、同誌の女性作家の割合はさらに上昇し、50%を超えるようになった。⁵

1887年にマルリットが、最後の作品を完成させることなく61歳で生涯を閉じた時、雑誌編集部にはこの作品をそのまま捨て去ることは考えられなかった。同年29号に掲載された追悼文には次のように書かれている。

もう一度マルリットの筆が『ガルテンラウベ』の欄を飾るでしょう。というのは、我々は読者の皆様に故人は最後の小説『梟の家』を完成することはできなかったものの、かなり進めていたので、同作品を任命された書き手によって彼女の意向通りに完成させることができるだろうという喜ばしいニュースをお知らせすることができます。我々は故人から引き継がれた義務を畏敬の念を込めて果たそうと努めています。そして今日既に読者の皆様に確信を持ってお約束できます。E・マルリットの遺作は遅くとも来年の初めには掲載されるでしょうと。(G 1887 H.29 S.476)

こうして編集部はハイムブルクに作品の完成を依頼し、この作品は1888年第1号から連載されることになった。この作品がどの程度完成されていたのかについては、当時の読者も疑問に思ったようで、「ロンドン在住のマルリットファン」からの問い合わせに対して、1888年46号の紙面に回答が書かれた。それによると「ハイムブルクによる続きは87ページの次の文から始まります。『公爵夫人の大きな輝く目はまるで童話を聞かせてもらっている子供のように驚いて老人を見上げた』(G 1888 H.46 S.788) これは全30章のうち第7

章の途中なので、マルリットが書いたのは分量にして全体の25%にも満たない。しかしこれは彼女の作品とされ、全集にも収められている。この一件でハイムブルクは『ガルテンラウベ』から「マルリットの後継者」と認定されたのも同然で、誰もがそのようにハイムブルクを評価するようになっていったのである。

3 『梟の家』

次に、マルリットとハイムブルクを結びつけることになった作品に目を向けていきたい。イーダ・サガラ Eda Sagarra はハイムブルク生誕150年(正確には152年になるのだが、1850年生まれとの説もあった)に寄せた寄稿で、彼女には他人の文体を自分のものにする能力があったと書いているが、(Vgl. Sagarra S. 234)それぞれが書いた部分に違いはあるのだろうか、そしてあるとすればどのような違いだろうか。具体的に作品に目を向けていく。

作品の舞台はテューリンゲン地方の小邦で、主人公クラウディーネの家が破産し、家財が競売にかけられる場面から始まる。彼女は宮廷女官として領主である公爵の母親に仕えていたが、男やめの兄とその幼い娘の面倒を見るために職を辞して、3人は「梟の家」と呼ばれる廃墟となった古い修道院跡で暮らし始める。彼女たちの分家には同じ年の娘ベアーテとその兄ロタールがいた。ベアーテとクラウディーネは寄宿学校仲間で、有能なロタールは領主からの信頼も厚く、臣下であるにもかかわらず領主のいとこと結婚した。しかしその妻は生まれたばかりの娘を残して死んでしまい、彼は病弱で2歳になっても歩けない娘を連れて領地に帰ってきていた。

競売に出された邸宅を買ったのは領主の公爵だった。公爵は森に囲まれたこの屋敷を病気の妻の静養場所にするとっていた。しかしクラウディーネが宮廷を去ったのには、この公爵から言い寄られそうになったからという事情もあり、彼女は複雑な感情を抱く。一方、ロタールの死んだ妻の妹ヘレーネは彼との結婚を画策し、「孫に会いたい」という自分の母親と共に彼の領地に滞在する

ことになった。彼は実はずっと前から密かにクラウディーネのことを愛しており、彼女もそうだったのだが、ここにきて公爵とクラウディーネ、クラウディーネとロタル、ロタルとヘレーネという厄介な三角関係が出来上がる。自分の死後、夫と一緒にあってほしい (E S.248) と公爵夫人に言われたクラウディーネが身動きの取れない状況に陥る中、彼女が公爵とただならぬ関係になっているとのうわさが流れ、彼女は周囲から無視されるようになる。この状況から彼女を救うため、ロタルは彼女に結婚を申し込む。高潔な人物で通っている彼と婚約したことにより、すぐに公爵とのうわさはただの誤解だったということになった。しかしクラウディーネは領主との不倫騒ぎで家名が汚れるのを避けたいがために、ロタルが自分に結婚を申し込んだにすぎないのだと信じこみ、彼を避ける。結局、死の迫った公爵夫人がロタルの気持ちを確認したことと、ロタルが姑にクラウディーネへの愛を言明するところを彼女が立ち聞きしたことにより誤解は解け、二人は結婚する。

この物語は主人公が困難を経てふさわしい相手と結婚するというマルリット作品の定型といってもよい展開を辿ってはいる。登場人物の関係や置かれた状況はマルリットが書いた冒頭ですでに定まっているので、その後の展開もほぼ彼女の構想に従って進んでいる。そんな中で印象に残るのは主人公クラウディーネの弱さである。マルリット作品の主人公たちは、敵対的な環境や人物に対して自分の力で自分の存在を確立していく。結婚相手となる男性がその性質に触れることで、自分を振り返り、彼女たちにふさわしい理想的な市民男性へと成長する作品もある。その意味でも「シンデレラ・ストーリー」という評価は的外れである。ところがクラウディーネは状況を嘆き、悩むことはあっても、自分で状況を改善するために行動することはない。領主である公爵に反抗することはできないかもしれないが、自分の周りの敵対者にも、最も理解してほしいはずのロタルに対しても何もしない。結局死に瀕した公爵夫人のとりなしと偶然の立ち聞きにより、事態が動くだけなのである。この主人公の行動力（のなさ）はマルリットとハイムブルクを大きく分けるものだといえる。⁶

ところでマルリット作品の結末を飾る主人公の結婚は単なる恋愛の成就を意味するわけではない。『ガルテンラウベ』は今日では非政治的な娯楽雑誌とみなされている。しかしその精神的支柱は 1848 年の 3 月革命の精神を受け継ぐ自由主義と進歩主義だった。（竹田 2017、27 頁参照）マルリットは、その作品で労働、質素、勤勉といった市民階級的美徳を備えた主人公が幸福を手に入れるまでを描くことにより、この雑誌の理想を読者に広める役割を果たした。主人公がこの理想を体現する男性と結婚する結末は、市民的価値観の勝利であり、彼らのイデオロギーそのものである。

このような市民階級の価値観を主張する政治性はハイムブルクには感じられない。先に述べたように、彼女の描く女性たちは、ただ涙を浮かべて苦しんでいるうちに偶然運命が好転するのである。この受動性はマルリットと大きく異なる点で、彼女らについての数少ない研究書でも指摘され、しばしば批判の対象となっている。例えば、「彼女[クラウディーネ]は絶え間なく苦しんでいるので、高貴な苦悩する女性の役柄がこの作家の女性像であるとの印象を受けてしまうほどだ」（Dingeldey S.99）、ハイムブルクの登場人物は「しっかりした性格の人物がいない。一むしろ登場人物は出来事や感情の担い手にすぎないので、真の緊張は生じないし、その運命への真の関わりもない。」(Arens S.142)「理想も意義、愛国的意義すらなく、思考もない。」(Arens S.145)、「『梟の家』にはマルリットの傾向と現代性とともな魅力がない」(Arens S.420) などと酷評されている。

しかしマルリットの後継者と考えられる作家たちを研究したウルズラ・ボンター Urszula Bonter は、ハイムブルクは一般に思われているほどマルリットを志向していたわけではなく、マルリットのように『ガルテンラウベ』やカイルの理想を共有するより、むしろそれを疑っていたと述べている。(Vgl. Bonter S.79) 確かに初めての長編小説のタイトル *Aus dem Leben meiner alten Freundin* はマルリットの『老嬢の秘密』 *Das Geheimnis der alten Mamsell* を思い起こさせるし、『ガルテンラウベ』で発表した第 1 作『リースヒェン』の、貴族にいじめられる市民階級の娘

が貴族の男性と結ばれるストーリーや、その館にある肖像に描かれた先祖にあこがれを抱いている登場人物が、自分の認識が間違っていたことが分かるとその人物に対する評価も変えるというエピソードも『金髪のエルゼ』や『帝国伯爵令嬢ギゼラ』 *Reichsgräfin Gisela* (1869) と共通している。しかし『ガルテンラウベ』では忌避されていた自殺を描いたり⁷、後には不貞による家庭崩壊を扱ったり、ハッピーエンドにならない恋愛、別々の人生を歩み年月を経てからようやく結婚が可能になったりと、彼女は「精神的後見人マルリット」(Bonter S.94) モデルから離れていく。

実はマルリットも後期の作品では金銭欲、名誉欲に囚われ、市民的価値観を忘れたブルジョワ家庭の崩壊も描くようになる。それはグリュンダーツァイトの投機的経済と産業の近代化に伴う社会構造の変化の中で、彼女が市民階級的美徳を信じてつも、自身も属するこの階級に果たしてそれを担う力があるのかについて疑念を持つようになった結果だと考えられる。(竹田 2019、22—23 頁参照) 彼女より 20 歳以上若く、彼女の 10 年後に作家デビューしたハイムブルクは市民階級の形骸化をより強く感じていたのかもしれない。

おわりに

ハイムブルクをマルリットの後継者にしたことには、『ガルテンラウベ』側からすると、看板作家を失った損失をカバーし、彼女の持つ求心力を保ちたいとの意図があったのだろう。ハイムブルクは確かにマルリットのファンだったし、マルリットに憧れて小説執筆を始めた。しかし「後継者」認定が彼女の望むものだったのかは分からないし、少なくともそれが彼女のためになったのかは疑問である。なぜならこの「称号」は一人歩きし、人気作家だったにもかかわらず、現在では作品を具体的に取り上げてこの評価が妥当だったのか検討することなく、彼女は常にマルリットに添えて名が挙げられるにすぎない影的存在になってしまったからである。

しかし先ほども述べたように、彼女は『ガルテンラウベ』の基本路線である「市民的価値観に基

づいた幸せな家庭」とは言えない結末を描くことも増えていった。フォンターネが不貞や一晚を一緒に過ごす身分違いの恋人を描き「インモラル作家」と見られていたのと同じ 1880 年代に、同じようなテーマを書いていたのである。しかし彼女は『ガルテンラウベ』の持つ理念を書き続けることは明らかにもうできなかったし、その意思もなかったものの、『ガルテンラウベ』の人気作家であり続け、別の雑誌や出版社で自分の世界を追求することはなかったのである。彼女の作品、特に今回検討することができなかった後期の作品をもっと丁寧に検討すると、第一次世界大戦で終焉を迎える市民階級が徐々に変質し内部から崩壊していく過程での心理が見て取れるかもしれない。

参考文献

- Die Gartenlaube. Illustriertes Familienblatt.* Hrsg. Von Ernst Keil und Nachfolger. Leipzig, später Berlin, 1853-1938, 1938-1944. Zit. nach wikisource,
Die Gartenlaube - Wikisource 本文では G と略し、発行年、号数、頁数を添えた。
Eugenie Marlitt: *Das Eulenhäus*. Tredition GmbH. O.J. 本文では E と略し、頁数を添えた。
Manfred Altnier, Artikel: *Wilhelmine Heimbürg*, in: *Sächsische Biografie*, hrsg. vom Institut für Sächsische Geschichte und Volkskunde, <https://saebi.isgv.de/biografie/17953> [Zugriff 31.12.2024].
Hans Arens: *E. Marlitt. Eine kritische Würdigung*. Wissenschaftlicher Verlag, 1994.
Urszula Bonter: *Der Populärroman in der Nachfolge von E. Marlitt. Wilhelmine Heimbürg, Valeska Gräfin Bethusy-Huc, Eufemia von Adlersfeld-Ballestrem*. Könighausen & Neumann, 2005.
Erika Dingeldey: *Luftzug hinter Samtportieren. Versuch über E. Marlitt*. Aisthesis Verlag, 2007.
Andreas Graf und Susanne Pellatz: *Familien- und Unterhaltungszeitschriften*. In: *Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. und 20. Jahrhundert*. Band 1 Das Kaiserreich. 1871-1918, Teil 2. Im Auftrag der historischen Kommission herausgegeben von Georg Jäger. MVB Marketing- und Verlagsservice des 1Buchhandels GmbH, 2003.
Heimbürg, Wilhelmine, Indexeintrag: *Deutsche Biographie*, <https://www.deutsche-biographie.de/pnd104352787.html> [Zugriff 31.12.2024].
Michael Kienzle: *Der Erfolgsroman. Zur Kritik seiner poetischen Ökonomie bei Gustav Freytag und Eugenie Marlitt*. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1975.
Eda Sagarra: *Wilhelmine Heimbürg*. In: *Mitteldeutsches Jahrbuch für Kultur und Geschichte*. Herausgegeben für die Stiftung Mitteldeutscher Kulturrat von Christof Römer, Bd. 7. Böhlau Verlag, 2000.
竹田和子: 「『ガルテンラウベ』 *Die Gartenlaube* 一大

衆化する活字メディアとその政治性」。『時代を映す鏡としての雑誌 ―18 世紀から 20 世紀の女性・家庭雑誌に現れた時代の精神を辿る』 日本独文学会研究叢書 124 号、2017、19―35 頁。

竹田和子：「E.マルリット作品に描かれた「家」の崩壊とその社会的背景 ―『商業顧問官の家』と『石榴石の髪飾りの女』を中心に―」、阪神ドイツ文学会 ドイツ文学論攷 第 61 号、2019、5―27 頁。

【注】

- 1 例えばマルリットについて同時代の文学史家、批評家のルドルフ・ゴットシャル **Rudolf Gottschall** は、彼女のデビューからの 3 作品を取り上げ、その人気の理由として不当な扱いをされた無垢の主人公が最終的に勝利するという「灰かぶり姫」モデルを挙げた。しかしこのモデルは後の批評家たちにより、彼女の作品を具体的に吟味することなく、貧しい孤児が裕福な男性と結ばれる「シンデレラ・ストーリー」に変化した。1970 年代に中小市民階級の社会的価値観に注目してマルリットを論じたミヒャエル・キーンツレ **Michael Kientzle** も、この図式をそのまま踏襲している。(Vgl. Kientzle, S. 64) またマルリットの全作品を取り上げ論じたハンス・アーレンス **Hans Arens** は、この論文で取り上げる『梟の家』の主要登場人物の娘を間違えて「少年」としている。(Arens S.419)
- 2 ハイムブルクの経歴については、『ガルテンラウベ』の記事の他、ボンター、*Sächsische Biografie*、*Deutsche Biographie* を参照した。
- 3 ベルリンで発行された女性向けファッション雑誌 (1851-1879)。
- 4 ドイツ語圏最古の新聞の一つ (1664-1944)。この時代は国民自由主義の立場を取っていた。
- 5 女性作家の割合は、創刊 (1853 年) から 28 年間では 20% に満たなかった。(Vgl. Graf und Pellatz, S.442.)
- 6 主人公が立ち聞きによって、自分が愛されていることを知り、悩みから解放されるエピソードはハイムブルクの他の作品、例えば、『ガルテンラウベ』デビュー作『リースヒェン』、『梟の家』の前年に発表された『もう一人の女』 *Die Andere* でも見られる。
- 7 『リースヒェン』では主人公と結婚することになる貴族男性の父親が経済的行き詰まりから、家族を残して自殺したという過去が描かれる。ただし、マルリットも『帝国伯爵令嬢ギーゼラ』で自分の悪事が暴かれた大臣が自殺しているので、これは必ずしもタブーだったとは言えない。

本研究は科学研究費助成事業・基盤研究 C「ドイツ帝政期の女性作家による娯楽文学の諸相」(23K00434)の助成を受けたものです。(研究代表者：横山香、研究分担者：竹田和子)